

MSPとは??



MSP(モンゴル・スタディ・プログラム)とは、国連フォーラム(国連の活動に興味・関心を持つ様々な年齢層・バックグラウンドの個人からなるネットワーク。詳細は最終ページをご覧ください)が実施しているスタディ・プログラムです。

2010年の東ティモールを皮切りに、タイ、カンボジアを訪問し、2013年はモンゴルを取り上げています。モンゴルは主な輸出産品である鉱物資源の国際価格が急上昇したため、2012年のGDP成長率が12%を超えるなどここ数年間劇的な経済成長を遂げています。その一方、貧富の拡大や環境汚染、人口の都市集中など、経済が成長していくに従って起きる様々な問題が発生しています。



これらの課題に取り組むモンゴル政府や同政府をサポートする国際機関等の活動について、25人の参加者が2013年6月から2か月のあいだに4回に渡る勉強会を行い、8月4日から11日までモンゴルの首都ウランバートル、ならびに地方部に渡航してそれらの取組みを目の当たりにしました。そして帰国後は報告書・報告会の準備に取り組んでいます。ただ現地に行って見てくるだけではなく、「みんなでつくる」をモットーに事前準備から報告書・報告会まで一貫して参加者全員で作りに上げていくことが、このプログラムの大きな特徴です。

MSP実行委員長からのメッセージ

国連フォーラムが主催する、みんなでつくる「スタディ・プログラム」も4回目を迎えました。これまでの東ティモール、タイ、カンボジアという東南アジア路線と異なり、今回はモンゴルを訪問しました。

この報告書は、モンゴル・スタディ・プログラム(MSP)の成果を共有するために作成するものです。では、MSPの成果とはどのようなもののでしょうか。私は大きく3つの成果があると考えています。達成しつつある2つの成果と、これから達成すべき成果が1つだと思っています。

まず第1の成果は、参加者それぞれの将来のキャリアを考える素晴らしい機会であったことです。モンゴルを取り巻く諸課題について参加者が事前に勉強し、現場でその活動に触れ、また事後に議論することによって、課題に対する考察とともに、より理解を深めることができました。これらは参加者全員にとって将来の糧となるのではと期待しています。

第2の成果は、参加者間のネットワークづくりです。プログラム中の参加者同士の交流はもちろん、単なるプログラム参加者の枠を超えたネットワークづくりに貢献することができたのではないかと思います。このスタディ・プログラムのメンバーは、プログラムが終了しても(まだ終了していませんが)メンバーであり、仲間であり続けます。そのような機運が報告書でも感じていただけるのではないのでしょうか。

最後に、これから達成すべき成果ですが、それは、MSPのプロセスやこれらの成果を紹介し、国連フォーラム内外での議論を盛り上げ、国連等の活動への関心を高めることです。この報告書がまさにその役目を担っていると思います。この報告書は、参加者全員がそれぞれ執筆し、それぞれの視点でそれぞれの思いが語られています。こういった思いは、これから開催される報告会でもみなさんと一緒に議論したいと思っています。

この報告書では、参加者の声だけでなく、現地でお世話になった方々のメッセージも含まれています。「みんなでつくる」スタディ・プログラムは、プログラム参加者だけでつくりあげられるものではありません。国内外でこのプログラムのためにお世話になったみなさんに心から感謝申し上げたいと思います



みんなでつくる「モンゴル・スタディ・プログラム」実行委員長 坂本 篤紀

事前準備

(2013年5月18日～8月9日)

モンゴル渡航前から「みんなでつくる」MSPは始まっています。

5月上旬の参加者発表後、各参加者は下表のように各班に分かれ、それぞれ予算策定、渡航時に必要な情報を満載した「しおり」の作成、モンゴルで実際に訪れる予定の国連機関やホテル・レンタカー会社との連絡、勉強会の企画・実施、そしてオフ会の実施も含めた広報活動など、さまざまな事前準備を行いました。

MSP 各参加者の役割分担		
	渡航前（事前準備）	渡航中
<u>総務班</u>	<u>総務チーム（5名）</u> 参加者情報の管理 予算経理に関すること 現金の管理・出納に関すること	総務係 財務係 保健係
<u>企画班</u>	<u>企画調整チーム（5名）</u> 参加者との連絡調整 「しおり」の作成 <u>プログラム・ロジチーム（7名）</u> 現地プログラムの策定 渡航中の各種手配	現地交流係 プログラム補強係 宿舎係 配車・交通係
<u>研究班</u>	<u>調査研究チーム（9名）</u> 勉強会の企画運営	プリーフィング係 ディスカッション係
<u>広報班</u>	<u>情報発信チーム（3名）</u> 広報メディアの活用に関すること 広報ツールの作成 オフ会の企画 幹事会との連携に関すること	写真・映像係 ソーシャルメディア係

実際の準備作業はメールを中心に行われることが多かったのですが、渡航までに4回の事前勉強会やオフ会を企画し、ネット経由だけでなく実際に参加者同士が顔を合わせる機会を設ける事で、お互いの事をより身近に感じられ、準備をよりスムーズに行うことが出来ました。また専用のFacebookページを立ち上げることで、参加者が自由に写真をシェアしたり、食事会を企画したりしました。このページはモンゴルの渡航後も参加者間の交流にとっても役立っています。



第1回 事前勉強会

参加者の声

6月16日に行われた第一回勉強会のテーマは、「①モンゴル社会の変遷」「②モンゴルの近代化に伴う諸課題」の二つでした。実は今回がほとんどの参加者にとって、他の参加者たちとの初顔合わせ！みな少し緊張していました。日本からの参加者は福岡、大阪、東京の各会場に集合。それぞれ挨拶を済ませた後はGoogle Hangoutでニューヨークやアルゼンチン、南スーダンなど海外からの参加者も含め互いをつなぎ、いざ初対面！

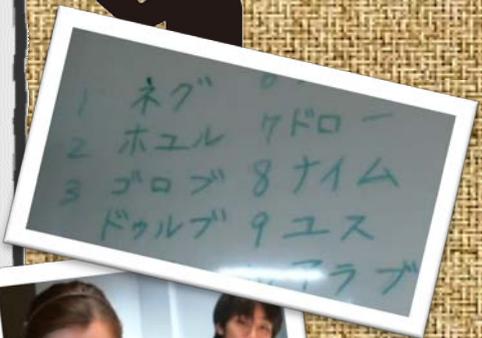
勉強会ではまず、事前にプレゼンを行いたいと立候補した福岡と東京の参加者からプレゼンがありました。注目されたのはモンゴルでは女子の進学率が男子よりも高いという事実です。遊牧生活では男子の力が必要なので、退学させられるケースが多いからだとのこと。参加者からの疑問の声に、発表者はもちろん、専門家である講師のご意見も頂けてとても有意義な勉強会でした。



参加者の声

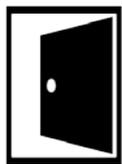
第3回事前勉強会は7月14日(日)に実施されました。今回のテーマは第一回・第二回勉強会を受けたまとめとディスカッションとモンゴル語講座でした。まず東京会場の参加者から「社会主義から市場経済へ ショック療法による体制移行」というタイトルのプレゼンテーションがありました。1990年代に始まった価格・貿易の自由化や家畜の民営化、土地の私有化等の影響をまとめてくれました。次に全体で「モンゴルで何をみたい・知りたいか」をテーマに議論をしました。国連組織や行政、経済という大きな枠組みに興味がある人と、モンゴル人や援助の受益者の考え方・生活・気持ちに興味がある人の二通りがいました。最後にゲストの方からモンゴル語の簡単な日常会話を教えていただきました。慣れない発音に苦戦しつつも、馬乳酒の頼み方をさく一幕もあり、大いに盛り上がりました。笑い声の溢れる楽しい勉強会になりました。

第3回 事前勉強会



準備は万端！
いよいよモンゴルへ！





現地プログラム

(2013年8月4日～11日 モンゴル)

【1日目】
国連ハビタット事務所
プロジェクト訪問

いよいよ待ちに待ったモンゴルでのプログラムの開始です！初日は国連人間居住計画(ハビタット)の事務所を訪問。首都ウランバートルでの貧困層の住宅環境を改善するプログラムが行われている現場にも訪問させて頂きました。



参加者の声

ハビタットが 2009 年からウランバートルで行っている「ゲル地区生活環境改善事業」の説明を受けました。同市は急速な人口増加の結果、生活環境が整っていないゲル地区が急激に広がっていることが問題になっています。これに対し、コミュニティが主体となりこの課題に取り組むことをハビタットは支援しています。事業は一定の成功を収めていますが、一方で遊牧民という歴史から、モンゴルの人々の間では地域で協力するという概念があまり浸透しておらず、人々を集めることの難しさという課題も挙げられていました。この説明を受けて一番感じたのが、「人々のニーズを理解すること」の難しさです。例えば、地域の協議会に誰が選ばれるのか、地域の中で力関係があるのなら、もしかしたら本当に貧しくて力がない人の声は、反映できていないかもしれません。これらの難しさを認識しているかどうか、援助をする側として非常に大切な視点だと思いました。



【2日目】
FAO プロジェクト訪問

2日目は FAO(国連食糧農業機関)事務所でモンゴルでの FAO の活動について説明を受けた後、FAO の地方でのプロジェクトを見学。夜はゲルと呼ばれる、遊牧民が伝統的に使用するテントに宿泊しました。

参加者の声

二日目に訪問したプロジェクトでは、中国が資金を出し、FAO が技術面でサポートを行う中、地元の NGO が中心となって運営が行われていました。プロジェクトの目的は、いろいろな技術を伝える事で野菜や毛皮製品の出荷までの期間を短縮し、出荷量を増やし、売り上げを向上させる事でした。説明をしてくださった NGO の方は、自分の仕事にとっても誇りを持っており、モンゴルの農業・牧畜の生産性を上げることが出来て嬉しいと生き生きと語ってくださったのが印象的でした。地元の方々がプロジェクトの中心に携わっていることは、プロジェクト終了後もその取り組みが現地で存続していくために重要なことであると思いますが、その後参加者同士でディスカッションを行う中で、現在の活動が本当に最適なものかどうかを知るためには、現地からの視点だけでなく、外部からのモニタリングも大切だという点に気付かされました。開発プロジェクトをマネジメントしていくためには、様々な視点に立って物事を考えることが要求されるのだと身をもって学ぶことができました。



【3日目】 FAO プロジェクト訪問

3日目には、車で数時間かけて、モンゴルでも最も農業が盛んであるとされるセレンゲ地方で行われているFAOのプロジェクトに訪問しました。

参加者の声

FAOの主導で行われている野菜の生産プロジェクトを見学しました。モンゴルは大草原のもとでの遊牧生活を古くから行っており、その性格上、一つの場所にどまって農業をするという形態は行ってきませんでした。ゆえにモンゴルの食生活はヤギやヒツジ、それらからとれる乳のような動物性たんぱく質が中心ということでした。FAOはそのようなバランスの悪い食生活に危機感を示し、モンゴルでの野菜生産を広げるプロジェクトを開始しました。私はこのプロジェクトの意義について深く考えました。野菜不足によって心臓病や、肝不全が増加しているとFAOの方は言っていました。しかし明らかにモンゴル人のライフスタイルに合わない農業が本当にモンゴルの人たちに受け入れられるのが疑問でした。その後のMSPメンバーでのディスカッションで「もし遊牧ができなくなった時の代替産業として農業を覚えることにも意義があるのではないか」という意見を聞き、食糧安全保障のプロジェクトを実施する上での難しさを改めて感じました。



4日目にはFAOの実施している森林保全プロジェクトを見学した後、約10時間かけてウランバートルまで戻ってきました。

参加者の声

モンゴルでは森林破壊が深刻化していますが、これに歯止めをかけることで、環境保全と、地域住民の生活向上を目的としたプロジェクトを見学しました。住民は伐採された木材から利益を得ることも可能で、農村の人々に新たな収入源を提供することも期待される効果の一つです。このような開発支援は、一方的に上からなされるものというイメージを持っていましたが、プロジェクト参加者が環境に対する意識を持って、有志のコミュニティを形成し、主体的に取り組んでいた点がとても印象的でした。まだ開始から間もないプロジェクトですが、当事者自身が中心となって運営されるかどうか、今後の継続的な成功を占う鍵になると感じました。プロジェクトに参加なさっているご家族からお話を伺い、畑など見学させていただいたほか、手作りのチーズやジャムもごちそうになり、美味しさのあまりついおいかわりしてしまいました。道なき道を数時間車に揺られての長旅でしたが、道中は見渡す限りなだらかな丘陵地帯で、美しい自然にも心揺さぶられました。

【4日目】 FAO プロジェクト訪問



【5日目】 ユニセフプロジェクト訪問

参加者の声

国立感染症センターでは、国際協力機構（JICA）の支援のもと行われた予防接種施策の現状についてお話を伺いました。このプロジェクトはワクチンの安定した供給を確保するという第一段階を終え、現状の分析に加えて、現地 NGO や医療以外のセクターと連携して事業を行うなど、より地域に根ざした事業展開をしています。ワクチンを保管する冷蔵庫には日本からの支援の証であるシールが貼られており、ここ 20 年で予防接種プロジェクトによりモンゴルの子供たちの健康状態改善に日本が大きく貢献したことを誇りに思うとともに、予防接種の普及によって防ぐことができる死や病が減ることを願わずにはいられない訪問となりました。

5日目は、ユニセフ（国連児童基金）の事務所を訪問した後、ヘルスケアセンター、ワクチン貯蔵庫などいくつかのプロジェクトサイトを訪問しました。夜はウランバートルにお住いの日本人の方とディナーをご一緒させて頂きました。



現地滞在中は国連機関の担当者に加えて、実際にプロジェクトに様々な形で参加しているモンゴル人の方達ともいろいろな交流を行いました。

参加者の声

私がモンゴルに渡航して一番思い出に残っている出来事は、訪問先で現地の人々と様々な形で文化交流ができたことでした。事前準備では、現地で渡すお土産として、日本のお菓子や大縄跳び、シャボン玉、お寿司の形をした消しゴムを用意しました。実際に現地では、様々な場所で子供たちと一緒に遊ぶ機会がありました。例えば5日目にユニセフのプロジェクト支援を受けている家族のゲルを訪問した時は、どこからか集まってきた大勢の子供たちと交流することができました。

また、3日目にFAOの農業推進事業プロジェクトを視察した時、そこで農業を行っているご家族からさばきたての羊肉やたくさんの料理を振舞って頂いた他、私たちの要望に応じてモンゴル相撲を披露してくださいました。参戦したMSPの男性メンバーは全敗してしまいましたが、このように温かく私たちを迎えてくださったことをとても嬉しく感じました。MSPでは、国連や行政機関の方に直接お話を聞けるとても貴重な機会が多かったと同時に、モンゴルの人々と触れ合い、生の声を直接聞くことができる機会もとても多かったと思います。今回視察をした様々なプロジェクトの対象は人々の生活の向上であり、その意味でも現地の人々との交流を通して、声を聞き、話しをすることの重要性を感じました。



【6日目午前】 自由行動プログラム

最終日となった6日目は、午前中はグループに分かれてそれぞれ関心がある NGO や企業を訪問し、国連機関とは異なる組織によるモンゴルでのプロジェクトの実施について学ぶ機会を得ました。



Save the Children



住友商事 訪問者の声

自由行動として住友商事を訪問し、藤原さんから話を伺った。藤原さんからは、住友商事がモンゴルに進出して事務所を構えて以降、モンゴル国内において、携帯電話会社(Mobicom)で成功を収めるまでの経緯に加え、モンゴル人の民族性・思想・価値観、モンゴル政府の関心事など、長年モンゴル国内の経済発展を直に見てきた方ならではの話を聞くことができた。MSP の本編のプログラムでは、国際機関又はモンゴル人の視点から見たモンゴルの開発・発展について学ぶことができたが、藤原さんのお話は、モンゴルに駐在している日本人から見たモンゴルという視点という新しい切り口のお話を伺い、非常に新鮮だった。なかでも、「遊牧民族のモンゴル人には、元来物を作るという事に対する美徳意識が希薄である。」「個人意識が強く、集団を形成し活動する事に慣れていない。」といったお話は、モンゴルの人々が共同体を形成して、野菜作りや森林保護活動を行うことに困難を覚えているという問題の本質を言い当てているように感じた。ほかにも、MSP の本編を通して感じていた疑問点の多くについて、藤原さんに質問させて頂き、話題は、モンゴルの法整備状況から、医師等の士業の質、ウランバートル市内の建設規制等、多岐にわたったが、これらの全ての質問に快く答えてくださった。以上のとおり、藤原さんは、モンゴル人の民族性等から遡ってお話していただき、この訪問を通じて、モンゴルの現況についての理解をより深めることができた。



Save the Children 訪問者の声



Save the Children ウランバートル事務所を訪問し、現地事務所長からお話を伺いました。モンゴルでは都市部でも地方でも教育に対する意識は高いのに、それを生かさないシステムが問題だというお言葉が印象的でした。また、十分な家庭の保護を受けられない子ども達のために設立された Child Center も見学させて頂き、そこで働くモンゴル人の職員の方とお話させて頂きました。それぞれのお話から政府や国際機関と連携し、教育と子どもの保護に重点を置いた幅広い活動がなされていることがわかり、NGO アクターの開発における存在の大きさを身をもって感じました。「子どもの権利の保護」を第一理念とする活動をされている方々からお話を伺ったことは、子ども達の未来を守りたいという初心を改めて思い返すきっかけとなり、とても刺激的な経験でした。

HIV/AIDS における NGO 施設 訪問者の声



メンバー4名で、モンゴルの HIV/AIDS における NGO 施設へ訪問しました。一つ目はトゥギャザーセンター(Together Center; TC)です。TC は HIV/AIDS の知識提供等の啓蒙活動、VCT(Voluntary Counselling and Testing: 自発的カウンセリングと HIV 検査)を行っており、1名の医師と2名のアウトワーカーが働いています。医師はモンゴルの HIV/AIDS や男性同性愛者の世界ではとても有名な方です。TC では、ユースフォーヘルス(Youth for Health; YfH)のスタッフを交え、TC の施設の概要や取り組みの他、モンゴルの HIV/AIDS に関する歴史的背景、陽性者数、陽性者への課題、モンゴルの性教育、差別や偏見、偏見差別に役立っている有名など、現地ならではの興味深いお話をたくさん頂きました。オフィスには世界各地で配られているコンドームの展示があり、こちらも興味深かったです。二つ目は YfH です。YfH は主に HIV/AIDS における教育、意識改革、人権についてのアドボカシーを行っています。宿泊施設(ベット1台とソファー)もあり、帰る所が無い人へ無料で貸し出しされます。モンゴルの冬場の気温は-40℃となる事もあるため、冬場は重宝されています。



【6日目午後】 全体ディスカッション

午後はプログラムの総決算としての全体ディスカッションを実施しました。諸事情で渡航できなかった参加者も日本・韓国からオンラインで参加しました。

三ヶ月の準備期間と現地での一週間の体験を踏まえて、まさに総決算としてのディスカッションを最終日に行いました。その司会を任されることとなったのですが、多人数のディスカッションを進行するという経験などなかった私は、様々なバックグラウンドを持ったメンバーを前にドキドキしながらの司会でした。前半部では、事前に設定したいくつかの論点に基づいて、チームに分かれてディスカッションを行いました。私の班では、モンゴルの伝統文化と都市化という観点から、モンゴルの人々にとっての本当の幸せとは一体何だろうか？ということなどを皆で話し合いました。後半部では、各班で出した意見を互いに発表しあい、メンバーそれぞれの考えを共有することが出来ました。知識も経験もない私は、まさに当たって砕けろの精神で司会に望みましたが、皆の意見を拾い上げながら議論の流れを作っていくことの難しさを改めて感じました。個人的には手も足も出なかったなあというのが感想ですが、今後は、プログラムでのこうした経験をバネにさらなるステップアップを図って行きたいと思います!!



現地ですっと通訳をして頂いたモンゴル人のトヤさんから、MSP に対してメッセージを頂きました！



今回日本人のみな様のおかげで MSP に参加できて本当に嬉しく思っております。今まで国連と言うこと聞いて凄く力のある大きい企業だと思っております。詳しいことはぜんぜん分かりませんでした。今回 MSP のおかげで、世界中で力合わせて発展するために活動が行われていることを理解できました。先進国はいろんな分野で発展途上国の人びとに支援したり、技術を教えたりすること理解したので、次はモンゴルが支援をもらう国ではなく、援助する国になるまでがんばりたいと思いました。また、ディスカッション本当に良かったです。みなさんのようにディスカッションすればあるテーマのことを TEAM でいろんな方向の視点から理解出来ることが分かりました。是非いかしていきたくておもいました。それで英語勉強して世界中のみなさまと一緒に国際社会・国連代表として生きていきたいです。

帰国した後も、MSPの参加者
同士での交流はますます盛ん
に行われています。

